



TITLE:

歐米再遊日誌

AUTHOR(S):

山本, 一清

---

CITATION:

山本, 一清. 歐米再遊日誌. 天界 1938, 18(209): 348-353

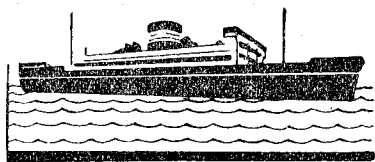
ISSUE DATE:

1938-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167706>

RIGHT:



## 歐米再遊日誌

理學博士 山本一清

此の八月上旬にスウェーデン國ストックホルム市で開かれる國際天文同盟第6回總會へ、黃道光の初代の部長として出席の義務を感じ、昨年から其の準備を進めつゝあつたが、年末から年始にかけ、内外の要務が身邊に山積し、一時は出張が殆んど不可能と思はれ、危ふく斷念しやうとした。ところが五月末に至つて心氣環境共に一轉、いよゝ々外遊決行することとなり、旅券や、船室の交渉も迅速に涉つた。

六月14日の夜行で京都を出發し、東京と横濱で種々の要務をすませた後、19日早朝、横濱港第4號岸壁で、川崎汽船の新裝船“照川丸”に乗る。

1938年6月19日（日曜日）曇り、時々晴れ。

船が豫定より遅れて昨夕横濱に入港したため、出航の時刻も不明で、只“翌未明”とのみより知れず、止むを得ず、當て推量で、6時頃出港するものとし、4時半宿で起床、見送りの英子と共に、5時10分神田驛發の省線電車に乗り、横濱のYMで、預けて置いた荷物を受け取り、岸壁に駆けつけた。しかるに、船は今正に岸を離れ、解纜しやうとしてゐる危機一髪の時なので、急にランチに飛び乗り、見送りの人々に挨拶もそこゝ々、本船に乗り移つた。正に6時20分！

船は1934年に北歐で作られ、昨年我が國で改裝された優秀船で、總トン數6400トン、しかも之れが太平洋の處女航海である由、と聞く。

天氣は8分通りで、時々日光が漏れるばかり、風は北、波も少々あり、船は午后に外洋へ出でて、ウネリが可なり強い。

同船者は神戸商大學生岡野正君のみ。

本日正午の船の位置、東經140°33'5, 北緯35°07'.

6月20日（月曜日）終日曇り、氣溫は冷涼。

正午の船の位置、東經146°13', 北緯38°20'.

昨日からのウネリは今日午后になつて稍々おさまる。朝9時頃、船のエンジンが止まつたので、不審に思ひ、聽いて見たら、ブルヴのリペトがゆるんだの

を修理したのだとの事。東京小口氏より祝電至る。

午後4時から6時までの間に同社船フロリダ丸(南米航路)を抜く。この船は18日に横濱を出たものである。

6月21日(火曜日) 曇り、波静か。

正午の船の位置、東經152°55′, 北緯41°17′, 氣溫水温共に14°C。

午前中、各方面へ手紙と御禮状とを書き、それより、歐洲での旅程の研究を始める。今度の外國旅行は、非常時國策のため、旅費を制限されてゐるので、旅行日程の定め方も、中々むづかしい。

齋藤、菅兩氏より來電。

6月22日(水曜日) 曇り。

船の速度が速く、毎日の時計の進め方も甚だしいので、食事の時刻も實に忙しい。それで、自分だけは、ボーイに無理を言つて、朝は8時にキャビンの中で、トーストとコーヒー、お晝は正午に船長たちと一所に食堂、晩は特に時刻を1時間くり下げて、18時にたべることと定めた。

無線のニュースによれば、今夏、南米ペルーから我が日本へ文化使節が來朝する由。それでは、或は此の使節團中には、自分が昨年あちらで御世話になつたガルシヤ博士等も居られるか知れないし、どうしても之れは一つ自分も出来るだけ接待をしなければなるまいと、切りに考へる。

正午の船の位置、東經159°30′, 北緯43°27′, 溫度12°C。

6月23日(木曜日) 霧のため、船は笛を吹きづめ。

正午の船の位置、東經166°02′, 北緯45°09′, 溫度8°。

急に寒くなつて來たので、キャビンの中に電氣ヒーターを入れ、着物は2枚重ねる。外には雪らしいものが降つてゐる。

會社の急命で、船はキューバ島のハバナ港へ寄ることゝなつたので、ニューヨーク入港は豫定より遅れるらしい。之れでは自分の旅程にも差支へて來るので變更して、ロスアンゲレス港に上陸し、それからニューヨークへ陸行しやうかといろ々々考へる。

6月24日(金曜日) 曇り。

正午の船の位置、東經171°29′, 北緯46°11′, 氣溫9°, 水温8°。

終日、船室内で黄道光の報告材料を整理する。東京の英子より來電。

**6月25日（土曜日） 薄曇り。**

正午の船の位置、東經 $178^{\circ}05'$ 、北緯 $47^{\circ}55'$ 、航走毎時平均15浬89。

誠に吞氣で、船を獨占してゐるやうな感じである。終日、黄道光の報告内容の調査考究。英子へ着發電。

空が晴れないので、天體觀測は望み少し。

**第2の6月25日（やはり土曜日） 曇り。**

昨日中に $180^{\circ}$ の經度線を越えて、西半球に入つたので、今日も亦25日で、土曜日。この日、正午の船の位置は西經 $173^{\circ}07'$ 、北緯 $48^{\circ}03'$ 、航程335浬、温度は $9^{\circ}$ 。

宅にゐると、此の頃は多忙で、殆んどラヂオのニュースなどは久しく聞いたことは無かつたが、船に乗り込んで、多少暇が出来たため、毎日何同となく無線室に飛び込んで、ニュースを聴く。

**6月27日（日曜日） 曇り。**

正午の船の位置、西經 $164^{\circ}23'$ 、北緯 $48^{\circ}0'$ 、昨日より航走350浬。

温度は $9^{\circ}$ 。今日も黄道光の報告整理に費す。

夜は、餞別として牧野氏から頂いた大塚氏筆のマルコ傳講義を読む。素人教師の熱心に大に動かされる。

**月27日（月曜日） 曇り。**

正午の船の位置、西經 $156^{\circ}45'$ 、北緯 $47^{\circ}11'$ 。昨日より航程310浬。

今日から、ストックホルム會議で讀むべき黄道光の報告を、室内でタイプし始める。遂に22時までかゝる。吉田氏へ發電。

**6月28日（火曜日） 曇り。**

正午の船の位置、西經 $148^{\circ}41'$ 、北緯 $45^{\circ}47'$ 。昨日よりの航程333浬。

もはや桑港へ1270浬となつた。——自分は、之れが第6回目の太平洋横斷であるが、靜かで、吞氣な、好い船を選んだため、毎日まことに愉快で、殆んど自宅に休暇を取つてゐるやうな感じである。和服で、和食で、日本風呂に入つた生活のまゝ、アメリカに近づきつつある。

午後、夕食までに、黄道光の報告文を4部タイプし終つた。之れで、一つ肩

の荷が降りた気がする。室外の気温 $9^{\circ}$ 。海上は微風で、波は無い。

#### 6月29日（水曜日）

正午の船の位置、西經 $143^{\circ}20'$ 、北緯 $44^{\circ}46'$ 。

急に温度が上昇して来た。正午の気温 $17^{\circ}$ 、水温 $14^{\circ}$ である。それで、今日から室内のヒーターを止める。二三日前から舷に變なものが群つてゐると思つたが、今日岡野君が水を汲み上げて見たところ、之れは皆珍しいクラゲの類であつた。實に夥しくて、林の中の木ノ葉のやうに多い。

桑港の富澤氏に来る2日到着の由打電する。又、英子よりは、九月のペル文化使節團接待員に内定した旨の電報が来た。

終日、荷物の整理と分類とに忙しい。夜は手紙をかく。

#### 6月30日（木曜日） 曇り。

正午の船の位置は、西經 $135^{\circ}35'$ 、北緯 $44^{\circ}06'$ と、船橋から報告されたが、緯度の方が一寸怪しい。久しぶりの天體観測によるといふことであるが、温度は益々高く、気温は正午に $20^{\circ}$ 、水温は $17^{\circ}$ 。室内では、シャツの上にセル一枚となる。船は平均毎時15マイル以上で、誠によく走る。そして風は追風であるから、波は可なりあるけれど、殆んど揺れない。

今日も、荷物の整理と、論文のタイピング。

#### 7月1日（金曜日）

正午の船の位置、西經 $128^{\circ}37'$ 、北緯 $41^{\circ}11'$ 、昨日より航程354浬。

海上は白波が立つて、風は可なり強いけれど、丁度それは北西風で、船を追つて來てゐるため、動揺は殆んど無く、それに時々日光が雲間からもれて、晴れやかである。

今日も朝から論文のコピーを澤山タイプした。それから荷物の入れ換へやら、いろいろ。明日の正午過ぎに桑港へ入港する豫定なので、何となく氣忙しい。温度は、気温が $18^{\circ}$ 、水温が $16^{\circ}$ 。船も調子よく、毎時15マイル以上を走つてゐる。

#### 7月2日（土曜日） 曇り。

正午の船の位置、西經 $122^{\circ}32'$ 、北緯 $+37^{\circ}47.5'$ 、気温水温共に $13^{\circ}$ 。

いよ々々今日は久しぶりで午前中から、左舷に陸が見え、午後には金門灣に

入港、15時頃、桑港の第45號岸壁に着いた。丁度此の船の傍らに、同じ會社のノルエー丸が着いてゐる。此のノルエー丸は、昨年の今頃、我々の日食觀測器



桑港、オークランド灣の長橋

械と共に柴田堀井兩君がベールへ往航の時に乗つた船で、特になつかしい。幸ひ昨年來おなじみの船長にも會つた。あちらも誠に此の奇遇に驚いてゐられた。

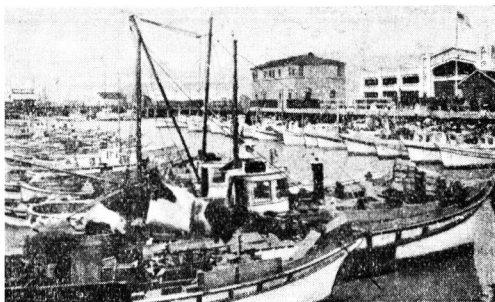
岸壁まで出迎えて下さつた富澤氏に連れられて、散歩のため上陸し、日本人街で買物などし、YMCAを訪ね、それから、富澤氏に別れ、岡野君と二人でヤマト・ホテルで晚餐を食し、後、歸船した。

7月3日(日曜日) 晴れ。

休日で、今日は船の荷役をしないため、全船静かである。自分は又、岡野君と十時頃から外出して、15時頃に歸船し、手紙など書いた。夜は船中の燈火もないといふ徹底した休みぶりなので、ボーイに石油ランプをつけて貰つて、夜は讀書す。

7月4日(月曜日) 晴れ。

今日は米國に於ける最大祭日たる“獨立記念日”である。しかし、約束により、船は午前中は荷役をやるのだから面白い。自分は朝9時から市街へ散歩に出かけ、マーケット街で10時過ぎから約半時間にわたる美しい行進を見た。官吏や陸海軍隊から、男女の諸團體に至るまで、いろいろな實演しながら街路を練り歩く有様は、面白かつた。



お江戸の魚岸に相當するか“桑港の魚市場”

船は午前中に荷役を終つたので、13時頃から出帆の準備にとりかかり、14時

過ぎ愈々離岸，金門灣橋の下をくゞつて，外海へ行進した。

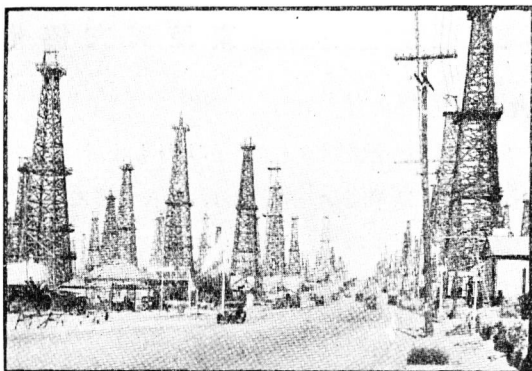
7月5日（火曜日）

正午の船の位置，西經 $119^{\circ}51'$ ，北緯 $+34^{\circ}13'$ 。氣温 $18^{\circ}$ ，水温 $17^{\circ}$ 。

空は曇つてゐるが，おだやかな海を船は走る。

左舷にはカリフォルニアの晴れやかな海岸の山や町々が見え，大小の船も行き交ふ。16時頃にはN YK の大洋丸が歸つて行くのとも會つた。

午後にサンダ・バーバラ海峡を通り，ロスアン



林立する石油櫓

ゲレス港即ちサンピードロ町に入港した。之れで愈々自分は永く慣れた照川丸に別れを告げ，税關の検査を終つた後，マツダ・グロイサの車に送られて，ロスアンゲレス市のミヤコ・ホテルに入つた。

## 鉛の同位素

アクチニウム屬の放射能元素の比率を求めるためにも，プロト・アクチニウムの原子量決定のためにも，アクチニウム・ウラニウムの半齡周期を決定するためにも，地球の年齡を算定するためにも，ウラニウム鉛の同位素成分を知ることが大切である。近頃，ドイツの J. Matthauch, V. Hauk 兩氏は，鹽化鉛の研究によつて，

同位素	204,	206,	207,	208 が,
それぞれ	1.15	24.55	21.35	52.95 %

だけ含まれてゐる。之れにより，ウラニウム鉛の原子量は 207.21 となり，1937 年度の國際原子量と一致する。

之れに對し，普通の鉛は，同位素 206, 207 のものが，それぞれ 95.1 % 及び 4.9 % 含まれてゐるので，全體の原子量は 206.01 となる。〔Nat. 3557〕